

# THE ONLY WAY TO WIN

ジム・レーア博士

「いったいどうしたって言うんだ。…僕はナンバーワンになったのに、虚しさを感じる。…誤った目標を抱いていたんだ。」私は、アガシの驚くほどあからさまな自伝を読んでいてこの文章を読んだときに、本当に椅子から落ちそうになりました。この言葉は、今まで私のプログラムに関わった数多くの名声を得た人たちの言葉と殆ど同じだったのです。「とどのつまり、勝利を得たところで何も変わらないんだ。」という告白を聞いたとき、本当に心臓が飛び出しそうになりました。私が仕事を通じて幾度となく見届けてきた、簡明な真実の表現だったのです。外的な物事の達成というものは、人間として基本的に求めるものを充足させることはできないのです。

このような感情表現をしたアンドレには驚かされるべきではありませんでした。彼が14歳の時にニック・ボロテリー・テニスアカデミーで初めて出会った当時、私は、そこに寄宿する200名を超える選手たちのメンタルトレーニングを担当していました。そういった選手たちの中で、アンドレは、疑念に満ちて嫌みたっぷりであり、強情でつきあいが悪くて用心深く、いつも怒っていて反抗的という、私が最も嫌いな人間でした。彼のような個性を持つ人間に指導をすることは、ことのほか大変なことでした。しかし、彼には天賦の才があったのかというと、全くその通りで、足も手さばきも目も驚くほど速かったのです。テニス界の誰もが、彼は荒削りながらプレーヤーとして成功する素質を持っていたと言いました。しかし、彼自身と彼のその多大な可能性が繋がる迄には、多くの個人的な障壁がありました。彼の子供から青春期は、心に深い傷を受けるようなことが常に起きていました。彼の父親は、アンドレがいつも猜疑心にさいなまれる元となっていました。彼の気持ちは、常に制御できずに不安な状態だったのです。

アンドレは16歳でプロに転向して、最終的に頂点を極めました。キャリア・グランドスラムを含めて、グランドスラム大会のシングルスで8回優勝し、オリンピックの金メダルも獲得し、アメリカのデビスカップ優勝に2度も貢献しました。

このような目覚ましい戦績から幸せが得られるとしたら、アンドレはまさに充足感を絵に描いたような存在であったでしょう。しかし、全くそうではなかったのです。彼の包み隠さない表現にあるように、そこには喜びや満足感や、テニスでの祝福すべき快挙からの安らぎなど、本来そうあるべきだと信じていたものではありませんでした。「私は運命から逃れるべく、『銀行に多額のお金があり自家用機を持っているんだから、不幸せであることはないんだ』。と自分に言い聞かせようとしていました。」と書いています。

彼の不本意な成績のほうがりざたされるようになった1997年になると、彼のランキングは下降の一步をたどり、141位にまで落ちてしまいました。彼は覚醒剤に手を出し、ATPのドラッグテストで陽性反応を告げられたのです。そして、ATPが再確認を要請したときに、彼はパーティーで飲んだアルコール飲料に偶々含まれていたのだという虚偽の手紙を書いてしまいました。

どん底まで落ちたとき、アンドレは自己改革をしようと立ち上がりました。彼のその自己改革が功を奏したのは、彼の言う「誤った目標」を放棄して、その後グランドスラムの大会や他の大会に勝とうが、彼の支えとなる新しい目標に切り替えたためです。彼は、その新しい目標につい

て考え続けていました。「他人のためになるようになることにこそ価値があるんだ。そうすることがその意味や価値を永く継続させることになり、我々はそのためにここにいるんだ。お互いの安心感のために。」こうして、彼の人生での大きな目的を掲げることができるようになり、それに向かうようになったことで、彼の生活は一変しました。テニスの目的を「他人に安心感を与えるためのもの」と考えるようになったときから、変化が起きてきました。

テニスから得る名声とお金を、彼の大きな目標達成のために使うようになりました。彼は、恵まれない子供たちのためにチャーター・スクール（税からの補助を受けながらも、従来のような公的教育規制を受けない学校）を設立しました。問題を抱えて混迷し、自己中心的で傷つきやすかった時期から、こういった人間に変化して彼の真の目標とテニスを繋げることができるようになるまでの道程には特筆すべきものがあります。ここで理解していただきたいのは、成功の影にある罠に陥ったのは、アンドレ・アガシだけではなかったということです。スーパースターであるうがなかりうが、我々は殆どと言って良いほど、悩ましい個人的危機を多かれ少なかれ経験しています。彼は、彼の職業と人生の大きな目標を繋げることで、テニスを値のつけられない贈り物に変えました。外的な達成を求めつつも、そうすることの新しい理由を見つけることができたのです。1998年に彼は薬物を止め、自らに厳しいトレーニングを課し、彼の中にいる悪魔を追い出すことに全精力を傾注するという新しい道の探求を始めました。そして、翌年には再びナンバーワンに返り咲きました。幸せであることが成功につながるの、その逆はありません。2001年には、アンドレ・アガシチャリティ財団は、恵まれない子供たちのために、一貫教育のチャーター・スクールである、アガシ大学入試準備アカデミーを設立したのです。以来、アガシは6千万ドル以上の基金を集め、生涯を恵まれない子供たちの救済に尽くすようになりました。

## 目的は至上の使命

目的がなければ、真に意味のあることはできません。行動は真の意味を持ちません。目的がないと、全てが苦悶となり、活動エネルギーをできるだけ最小に留めようという力が働きます。

人間として我々が持つ最も崇高なことは、目的をもてるということです。そのことが、人間と他とを区別しています。疑問を持てるということは、革新的な能力なのです。目的は、お金を得たり、道を究めようとしたり、トロフィーを獲るといったことを否定したり矮小化するものではありません。当面の達成感を与えてくれます。目的は、我々が行動する上でのより大きなエネルギーの元となります。アンドレ・アガシが、彼の真の目的に集中するようになったことで、彼は、以前はあれほどまでに蔑視していた外的な物事の達成の多くに有用性と価値を見いだせるようになりました。「やっと名声が意味を持つようになってきた。」と、ホッとしたように書いています。

私は、プロとして成功を収めて充足感を持っている世界的なプレーヤーも、成功を収めていながらも満たされることのないプレーヤーも知っています。

前者と後者の違いはどこにあるのでしょうか。長年に及ぶ調査と、私自身の数多くの経験から言えることは、充足感を見いだした人たちは、取り組んでいるスポーツを通じて個人の力を高め、そこから大切な内的な必要性を満たすようにしている人たちであるのに対して、そうで無い人たちは、そのスポーツから得られる外面的な報酬を求め、その結果として、心からの達成感を経

験することができない人たちなのです。要約すると、充足感を得られている競技者は、そのスポーツを人格形成のためと捉えており、そうで無い人たちは、両者に繋がりを持たせられなかった人であると言えるでしょう。

我々のヒューマン・パフォーマンス研究所本部には、小規模なエリートテニスアカデミーがあり、世界でプレーすることを目指す10歳から18歳の男女が週5日トレーニングをしています。彼らのトレーニングの初日には次のようなことを伝えます。

「このアカデミーでのこのエリートプログラムから求められる事やストレスは、あなたたちを強く澁刺とした素晴らしい人間へと導くためのものです。テニスの上達は勿論ですが、それ以上にテニスを通じて立派な人間に育って欲しいと思っています。

このアカデミーが最も目指すところは、良い人間性を持って勝利することです。毎日毎日が、自己制御、他人への思いやりの心、粘り強さ、積極性や信用性を伸ばす機会です。

プレーヤーとしての成績に差が出たとしても、テニスを人格形成の場と考えるならば、テニスはあなたたちにとって価値のつけられない財産となるでしょう。」

テニスを、人格形成のための手段であると単純に考えるようにすることで、プロでプレーするという目標が達成できようができませんが、費やした時間に意味と価値を見いだせるようになるでしょう。どんな事を達成しようとするにしても、それらが人間性を高めることに繋がるものであるという目標再設定をすることができます。思ったことの達成ができていなくても、そこからは本当に価値のある何かを得られているのです。しっかりとした人間性を持った勝利は、値段のつけられない内面の成長の機会に繋がります。

あなたの教えるプレーヤーに、競技をする上での性格面の強さを育て、しっかりとした人間性をもって勝たせるにはどうしたらよいかをもっと知りたければ、次のリンクから情報を得てください。 [www.mentallytough.com](http://www.mentallytough.com)

【翻訳・監修】 鈴木真一：アド・イン桜テニスクール(柏市)代表 / PTRマスター プロフェッショナル (2008) / PTRマスター委員会国際委員 / インターナショナル・マスター & クリニック / PTR プロフェッショナル・オブ・ザ・イヤ- (2001) / JPTR プロ・オブ・ザ・イヤ- (1986)